

## いわゆる“花曇り”の気圧配置\*

荒川 秀俊\*\*

毎年、春さきになると、風がよわく、晴れで煙霧のこく立ちこめた“花曇り”の天気が、少くとも数回おこる。

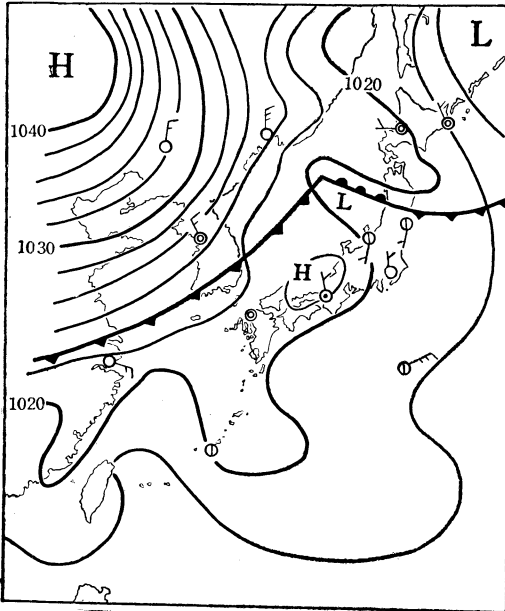
“花曇り”の特徴としては、

- (1) 春さきの梅や桜のさくころにおこる。
- (2) 風がよわい（もしくは弱い南風が吹く）、
- (3) 晴れている、
- (4) 煙霧がこく立ちこめて曇りとまちがえかねない、

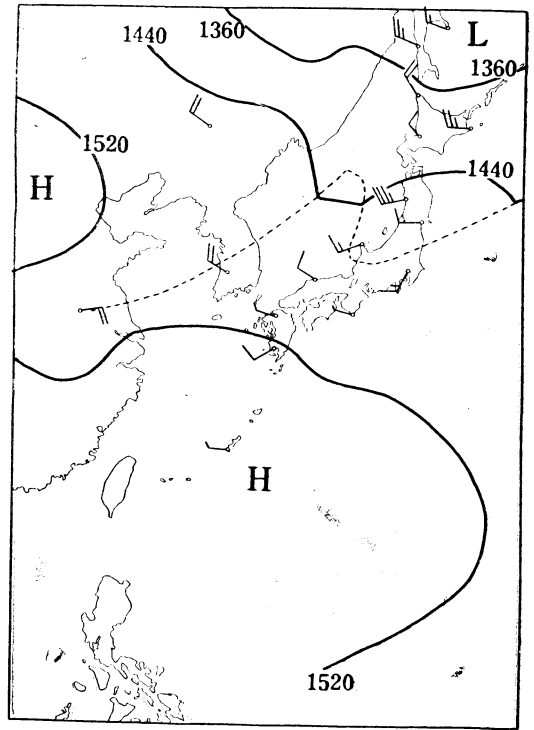
というような性質があると思う。私はこのような“花曇り”のおこるときの気圧配置をのべてみたい。

昭和35年3月2日はまさに“花曇り”の日だった。3月2日9時の天気図をみると、第1図のようになってい

庄がある。この高気圧は前日18時、黄海にあったものが東進してきたものであるが、移動性高気圧のうちでも目立って弱く、かつ小さいといって差支えあるまい。このように弱くて小さい高気圧が日本へさしかると気圧傾度がゆるやかになり、(a) 風がよわい、(b) 晴れる、(c) 煙霧がこくなるという“花曇り”の特性を現出する。とくに第2図と第3図に示したように当日の850mbと700mbの天気図によると、地上とともに850mbの



第1図 昭和35年3月2日午前9時の天気図(地上)



850 mb

第2図 昭和35年3月2日午前9時の850mb天気図

て、日本にひっかかっている等圧線はタッター一本しかない。そして中部日本をおおう1,022mbの小さい高気

上空でも風がめだって弱いことをしめしている。したがって3月2日には地上から850mbまでの厚い層にわたって風がよわく、まいあがったチリを吹きとばさないので、煙霧を濃くさせたことがわかる。このような小さくて弱い高気圧の東進は春さきに多いので、“花曇り”の

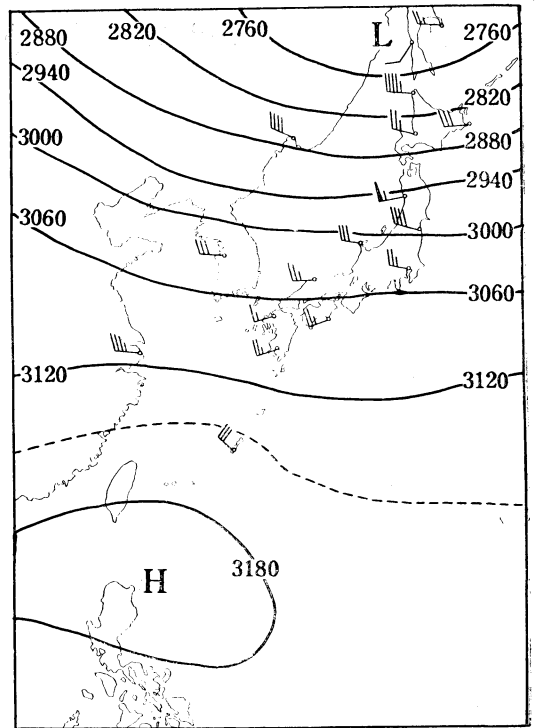
\* Characteristic Pressure Pattern for “Hana-Gumori” Weather.

\*\* Hidetoshi Arakawa, 気象研究所—1960年3月14日受理—

天気も春先きに多くなるのであろう。

要するに“花曇り”型の気圧配置は、東進する弱くて、小さい高気圧が日本にさしかかり、地上のみならず、上層 850mb まで気圧傾度がゆるやかになり、晴れて厚い層にわたり風がよわくなるので、煙霧が濃くなるのだといえるであろう。また日本海方面に低気圧があって、南風が吹くことも煙霧がこくなるのを助けるようである。

煙霧がこくなるための、もう一つの条件として (1)風が弱いことの他に、(2)気層の安定度を考えねばなるまい。地面付近の安定度は、一般に冬季安定度がよくなり、夏季安定度がわるくなる。春先き野や山に草木の芽が出そろわないころ、安定度がわるくなるので、弱い風にも砂塵がまきあげられることも、“花曇り”の一因となるであろう。



700 mb

第3図 昭和35年3月2日午前9時の700mb 天気図

〔新書紹介〕

荒川秀俊 訳 国際地球観測年

定価 100円 地人書館 昭和35年1月刊

アメリカ合衆国の国際地球観測年、国内委員会の事務局長ヒュー・オーデショウ氏が、国際地球観測年 (IGY) が終るにあたって、IGY 期間中に得られた業績を概説した『国際地球観測年』および、ホワイトサンズから発射されたロケットが偶然にもとらえた熱帯低気圧の写真を、L. F. ヒューバート氏、オットー、バーグ氏が解析した『熱帯低気圧のロケットによる映像』の2論文を荒川秀俊博士が訳したものである。

国際地球観測年は、上、下2篇に分かれており、上篇

では太陽活動、極光、宇宙線、地磁気、電離層の物理学、ロケットと人工衛星についての結果を報告し、下篇では気象学、海洋学、氷河学、地震学、重力測定、緯度・経度の確定についての結果を報告している。

口絵の写真15枚、本文中の写真16枚で、珍しいものも含み、本文の説明を助けている。国際地球観測年の視野の広さとその意義が、飾らない自然の面白さと、定評ある荒川氏の訳で読者に迫ってくる。